

## M E E T

## Miyako Environmental Education Times

発行：環境教育プロジェクト

平成27年(2015年)5月1日(金)

第78回の「環境教育ミーティング」は長岡京市の後援をいただき、「命の水を求めて死の砂漠が緑の大地に—地球温暖化による大旱魃と格闘する日本人—」と題して、西山浩司さんにお話しして頂きました。

内容は、アフガニスタンで「命の水を求めて」活動する中村哲医師の活動をDVDで鑑賞し、それを現地で支援された西山さん等のボランティア活動の様子をスライド見せていただきながら、生々しいしかも深刻な現地の実態をお話しして頂きました。



通水による3年間の変化  
H地区・スランプール平野



## 参加者の感想

## 1

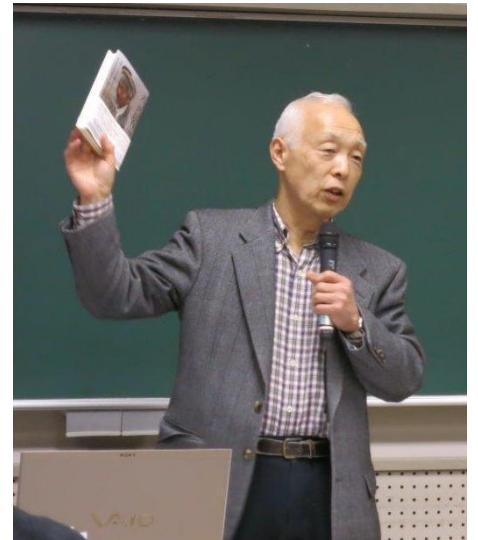
中村哲医師がアフガニスタンで支援活動をされていることはマスコミの報道で少しは知っていましたが、今日の講演で映像を通してその深い思い、また命がけの苦闘を知り、感動でいっぱいです。と同時に西山氏が安定した職を辞してまで、突き動かされるように中村医師のもとに駆け付けたその情熱に、唯々胸が熱くなりました。なかでも中村医師が何よりも現地の人たちの将来を考えて、自ら考え研究し、一大プロジェクトを完成させていく思いやりと粘りの行動には感嘆の一言です。西山氏がこのビデオを引っ提げて長岡中を講演していただきたく思います。特に若い人たちにぜひ見て、聞いて、考えていただきたいと痛感しました。素晴らしい貴重な体験談有難うございました。

## 2

全体のお話を通して、とても水の大切さを痛感させられました。何もなかった大地が水で潤い、緑の大地へと変化し、人々の生活を豊かにしていく様にとっても感銘を受けました。きれいな水が当たり前のようにあることに感謝しながらも、少しでも節水し、水を大切にする気持ちを忘れないようにしようと感じました。

## 3

中央公民館2階講座室で西山浩司さんのお話を、始めは何となく(失礼か



な?) 聞いていましたが、中村医師が医療の為にアフガニスタンへ行かれたのに、まずはその土地が砂漠のようになっていて、水が無いことに気づかれ(日本では考えられない)、まずは医療より水が必要とのことで、用水路を作る計画をされたとのこと、私はその時思い出したのは琵琶湖の水を京都へ流すことによって、物資を運んだり、水を利用することを考えたのですが(明治時代かな?)疎水を作ったり、インクライン(船が通れないところにレールを作り、その上に船を乗せ、疎水に運ぶ)が出来たことを思い出し、昔やっていたことを現在アフガニスタンでやっているということは、如何に貧しい大変な国が、今でも世界中にたくさんあることを思い知らされ、そんな国へ行かれた西山さんの勇気ある行動に、惹かれる思いがしました。自分たちにはもっともっと貧しい人達に何が出来るか? 考えさせられる問題が山積している思いがしました。

## 4

中村哲医師の活動には、ボランティアでもまた熟年の方でも、さらに1人でもこんなに大きな活動ができるのか

と本当に驚き感心しました。また、中村さんの活動に感銘し後に続かれた西山さんの行動力にも感銘を受けました。ミーティング当日にお会いした「普通のおじさん」の強い決断と行動に、少しでも見習いたいと思いました。最近の自衛隊の行動により、アフガニスタンの昔の日本に対する親近感や安心感が薄れてきたことは本当に残念です。国民のボランティア活動を支援すべき政府が、逆に市民を危険な環境に陥れていることに心から憤りを覚えます。

これからの海外でのボランティアさんの安全を祈りたいです。

## 5

世界的にも大変有名なペシャワール会医療サービス (PMS) 総院長の中村哲 氏の考え方・実践行動に深く感銘された西山さんが、中村医師の活動を少しでも支援したく志され、自らもアフガニスタンの厳しい環境に飛び込んで実践された大変貴重な体験談を聞かせていただきました。

乾燥した気候のアフガンであるが、かつては『実りの多い農業国』だったが、長引く戦乱に加え 2000 年に歴史的大旱魃が発生し、その後の『テロとの戦い』が追い打ちをかけ、国土の大半は疲弊し、砂漠化が進展していた。中村医師が働く PMS の診療所には、栄養失調や不衛生な水のため赤痢などに感染した幼子や高齢者が殺到したが、多くの命を落とした。

「銃は何も生まない」、『病気の大本を絶たなければダメだ』。中村医師は白衣を脱ぎ、清潔な飲料水と安心できる農業用水をもたらすため、用水路の建設を決意された。

03年の着工から14年までにPMSが

新設した用水路や給排水路の総延長は100キロを超えるそうだ。

西山さんも半年間もの長きにわたり、非常に過酷な環境下に身を置き、中村医師や他のスタッフさん達と井戸掘りや用水路建

設等に尽力されたそうで、大変なご苦労をねぎらいたく思います。

イスラム教との関係や拉致・殺害された伊藤さんの話など大変貴重な体験談を聞かせていただきました。瀬戸内寂聴さんのアドバイスが中村医師との出会いのきっかけだったとか。また、元の会社の同僚が中村医師と同級生だったなどの驚くようなエピソードも聞けて大変興味深い講演でした。

## 6

アフガニスタンの荒野に水路を作るに際し、土手や法面など、現地の方が修理できるように、ジャカゴ?など日本の土木の知恵が活かされていることに感動した。砂漠にあっては確かに「水は命」を感じさせられた。

それにしても、自らの身の危険を省みず、アフガニスタンの人々の健康、命のために活動されている中村哲医師に頭が下がる。

## 7

私が8年間続けてきた配食ボランティアの会を一時休会したとき、代わりに入会してきたのが西山さんでした。

彼がどのような経歴の人かまったく知りませんが、今回、案内のチラシを見てビックリしました。小柄で色白のひ弱に見え



る西山さんが、危険なアフガニスタンに行って井戸を掘る事業に参加するその勇氣ある行動に感服しました。

アフガニスタンは日本と同じ緯度であり、面積は日本の6分の1、人口は3000万人、イスラム放スンニ派が多い農業国である。雨が少なく、2000年の大干ばつでは多くの子供達が犠牲になり、被災者は400万人とも言われている。その上、人種間の争いも多く、平和とは何かと問われている。この現状に危惧した日本人の医者・中村先生は非政府組織「PMS」(平和医療団)を結成して子供達の病気の治療にあたった。しかし治療に限界を感じた先生は、病気の原因は水にあると考え、井戸掘り事業に着手した。西山さん等日本の技術者は現地人を指導して着々と井戸掘りを進めた。気温は部屋の中で39度、外で50度と過酷な環境下で1600本掘った。

さらに畑や田の灌漑用の水を得るため、河を大改修して食べ物を収穫できるようになり、水汲みが仕事になっていた女の子も解放され、貧しくてもようやく人間として生きて行け、自立できる国になったとしみじみと話してくれました。

最後に「イスラム国ISに殺された後藤さんもこの土地で農業の指導をされていて面識があった」とさりと語った事に大きな衝撃を受けました。さらにもう一言「中村先生曰く「幸せとは3度の飯を食べて何をそれ以上望むのか」。自分の人生を考えさせられる重い言葉に感動させられました。

